

鮎川信夫と「四つのクアルテット」

——わが国のT・S・エリオット理解の軌跡に関連して——

中 井 晨

「バート・ノートン」を巻末に収めた『全詩集 1909-1935』は1936年4月の出版である。ピーター・クィネルの書評が『ニュー・ステイツマン』の4月号に掲載された。時を移さず、『英語青年』はその7月と8月に、書評の原文に成田成壽の訳と注釈をつけて連載した¹。引用につけられた訳は、おそらく活字になったわが国最初の部分訳である。冒頭の五行を参考に示す。

現在の時と過去の時は
共に多分未来の時の中にある、
そして未来の時は過去の時に含まれてゐる。
もしすべての時が永久にあるなら
すべての時は取り返すことが出来ない²。

1936年。2・26事件のこの年、1920年生まれの鮎川信夫は16歳。予科時代の1939年秋に同人誌『荒地』の創刊を語りあい、エリオットの『荒地』第5章を詩の仲間と訳すのは1941年、卒業論文に「T. S. Eliot」を書くのが1942年。単位不足で大学を中退したこの秋に入塾。翌年、南方へ出征する。戦後になって、鮎川はこの五行にあらためて接することになるのだ。

ここでは、「バート・ノートン」から展開する新しい作品が、わが国にどのように紹介され読みはじめられたか、その経緯を辿り、1951年8月の『荒地詩集1951』に纏められた鮎川の代表的な評論、「現代詩とは何か」にこの作品が与えた痕跡を眺める。鮎川の仕事がエリオットの伝統論と『荒

地』の圧倒的な影響下にあると考えられているとすれば、若干の修正が必要であろう。

1

1937年7月に深瀬基寛の『ティ・エス・エリオット』が出版された。書誌には『全詩集 1909-1935』があげられているが、1939年2月の『現代英文学の課題』にも、この詩集にもとづくあらたな展開はない。深瀬ばかりではない。成田成壽の書評訳のほか「バート・ノートン」に関する戦前の論考があったとは寡聞にして知らない。本国でもおおきく注目されることもなかったのだ。深瀬が新しい詩集に触れるのは、1949年1月の『エリオットの藝術論』のあとになる。1951年8月の『現代の英文学』である。鮎川信夫の「現代詩とは何か」を収めた『荒地詩集1951』の出版も、この月であった。

新しい詩集が成立する跡を出版年によって確認しておく。「イースト・コウカー」：1940年春および9月、「バート・ノートン」[冊子として再度出版]：1941年1月、「ドライ・サルヴェインズ」：1941年9月、「リトル・ギディング」：1942年12月。これらを纏めたものが *Four Quartets*。アメリカではハーコート版で1943年5月、イギリスではフェイパー版で1944年10月の出版である。

エリオットの宗教的な作品を追っていた志賀勝は、1941年春のジェームズ・ジョン・スウィーニの雑誌論文に啓発されて、「イースト・コウカー」論を発表する。これは、1942年の1月から3月にかけて『英語青年』に連載された³。太平洋戦争突入直後のことである。日支事変以降、洋書の輸入は急速に困難になり、1941年後半にはほぼ絶望的となっていたことを思わねばならない。志賀の仕事は、洋書輸入の末期にあっていたのだ。かれはこの「イースト・コウカー」を単独の作品として扱っていたが、その後の展開についての情報は途切れることになる。シンガポール陥落にはじまった1942年の戦局は、ほどなくミッドウェイ海戦の大敗を経由して厳しくなってゆく

のである。

2

敗戦後の混乱期には、エリオット理解のための情報は研究者のあいだでも不足しており、また、発表の場をとってみても環境は充分ではなかった。発表の場となり情報の源となっていたのが、敗戦後数多く出現した総合雑誌、文芸誌、詩誌、同人誌などであった。1950年代のいわゆるエリオット・ブームをもたらす裾野はこのようにして用意されたのである。ひとりの詩人にすぎぬ鮎川信夫の場合を検討するにあたって、この環境への配慮はとりわけ重要である。

『雄鷄通信』は敗戦の年、1945年11月の創刊。その1946年4月、「雄鷄通信 Mar. 1946」の記事は春山行夫の手になるものと思われるが、ここに、わが国でエリオットの新しい詩集に文字どうり触れた、おそらく最初の体験がある。

T・S・エリオットの詩集『四つのクワルテット』（ハーコート・ブレース版、1943）とF・O・マシエセン編『ヘンリー・ジエームズ、作家・藝術家の物語』（ニューダイレクション版、発行年が入ってないが、新らしい本）が、珍らしく神田の古本屋に竝んでゐた。[小略]値段は二冊で一五〇円といふことであつた⁴。

駐留していた文学好きのアメリカ人が手放したものであろう。ちなみに『雄鷄通信』の購読料金は、奥付によれば「直接豫約は三ヶ月送料共十二円三〇銭、半年廿四円、一年四十八円」。この年、都内のある地域の家賃は月平均50円⁵であった。

『近代文学』は1946年1月の創刊。この年6月に、エリオットに触れた荒正人の「終末の日」がある。ただし、引用は『荒地』と「うつろなるひとびと」であり、エリオット理解は戦前の読書体験にかぎられ、以降の情報はま

だない。しかし、かれにとって、状況を見る眼としては、それで充分でもあった。30代の視点から記されたつぎの文章は、敗戦後のエリオット理解のひとつの典型となるであろう。

わたくしはなにも形而下の荒廢についていつてゐるのではない。爆撃のあとが廢墟と化したばかりではない。精神の領野がいかに荒涼たるものであることか。といつたからとて、あの新聞投書欄でしばしば指摘されてゐるやうな巷の小事件、乗物のシーツの剝奪、郵便小包の抜取り、横行する野荒しなど、所謂公德心の欠乏についていつてゐるのではない。

わたくしが心に描く日本の「荒地」は、もつとべつのものだ。もつと本質的なもの、文化的、文學的精神と感覺のすくひがたい荒廢についてなのである。それは、文化、文學領域での戦争責任の問題にもつとも露骨にあらはれてゐるのだ⁹。

最後の一行は、戦争責任論、世代論、主体性論などに展開される『近代文学』の拠点を映している。このことについて立ち入ることはしない。ただし、この評論の題が「終末の日」であって「終末の目」でないことは、注目しておいていい。

現実の荒廢をまえに、“荒地”を唄った詩人エリオットが強烈な印象を与えたことは想像に難くない。1947年9月、鮎川たちの雑誌『荒地』創刊号に「荒地へ——T・S・エリオットにおける詩と批評——」⁷を寄せた40代の西村孝次にとっても、エリオットが描きだした“荒地”が課題であった。一方、宗教的な立場を採るエリオットの姿は、戦前のエリオット理解を継承しつつ、信教の自由を保障された占領下社会のキリスト教への関心のたかまりとともに、真剣な課題となってゆく。

1948年5月の『基督教文化』に寄せた斎藤光の「神の暗黒——T・S・エリオットの詩——」は、表題からも明かなように、エリオットの宗教的立場を辿るものである。いまこそ“罪惡”を研究する時と提唱⁸する斎藤は、作品を再読することによって、敗戦後の荒廢の意味をエリオットを通して語る

うとした。ちょうどこの頃、『詩学』に連載中の佐藤清「T・S・エリオットの詩について」⁹が、作品紹介の域をはずし、また、戦前の志賀の理解にまで及ぶことがないことを考えれば、斎藤の仕事は重視されてしかるべきである。

わたしたちの直接の関心事についていえば、斎藤の眼は「バーント・ノートン」には及んでおらず、「イースト・コウカー」は手元にあったが、「ドライ・サルヴェイジズ」その他については“未だ手にとる機会がない”¹⁰としていることだ。その後の「リトル・ゴディング」はもちろん、1948年5月の時点でも、四、五年前に出版された新しい詩集に触れることができなかったのである。

平井正穂の場合はどうか。1948年10月の『英文学研究』に「人間性の問題——T・S・エリオットについて」を寄せた平井は、『キリスト教社会の理念』をめぐってエリオットと格闘していた。ただし、このとき、“第二次世界大戦へわが国が突入する直前に辛うじて手もとにとどいたエリオットの著書だけを”¹¹読むほかなかったのだ。

しかしながら、この1948年はエリオット理解が新しい展開を見せた年でもあった。ふたつの側面だけを見よう。

中桐雅夫は「不安の時代——W・H・オウデン論——」を雑誌『荒地』第6号に載せた。1948年6月のことである。ここに注目すべき事項がある。

外電がぼつぼつ英米文壇の消息を伝えるやうになつたが、それでも、その詩壇の実際の具体的な動きは知られるに至つてゐない。ところが最近、私はステイヴン・スペンダアが一昨年出版した『一九三八年以後の詩』といふ七十頁ばかりの小冊子を読む機会を得た¹²。

1946年出版の“小冊子”に、スティューヴン・スペンダーはエリオットの新作を採りあげていた。つづいて中桐は、その他の文献を手にして、「英詩の動向——新ロマンティズムへの道——」を書く。掲載されたのは『詩学』の

1948年11月号。かれはここで新しい作品に、「四つのクアルテット」の名を与えた¹³のである。

1947年12月にエドモンド・ブランデンが文化使節として来日したことは、エリオット理解にとっても大きな事件であった。ブランデンが研究室に一部を寄贈した詩集を筆写して読みはじめた平井の、「人間性の問題」執筆以降の、新しい作品への挑戦がはじまる。

1949年3月、『展望』の新刊紹介欄「世界の窓」に、平井の「T・S・エリオットの『四つの四重奏』」¹⁴が現われる。五年前の作品が、新刊として紹介されたのである。そして翌4月、「詩人T・S・エリオット—1—」に、平井はわが国で最初の本格的な、しかも、エリオットのキリスト教的立場への問いかけを含んだ良質の『四つの四重奏』論を展開する。のちの参考のために、作品の冒頭の部分の訳を引用する。

現在の時と過去の時と恐らくはこの二つは未来の時の中に存在しよう、
そしてまた未来の時は過去の時の中に含まれていよう。
もしすべての時が永遠に現在ならば
すべての時は曠うことは不可能なのだ¹⁵。

このとき、平井は“まだ筆写によるコピー”¹⁶をもとにしていた。しかし、1949年12月、『英文学研究』の新刊紹介欄「海外新潮」に『四つの四重奏』について書いたとき、かれの手元にはフェイバー版の第6版があった¹⁷。手元に届いたのは、この年の後半と推測される。おなじ号では成田成壽が、イギリス図書の輸入が許可されたので、前年、すなわち1948年の12月に、書店をとうして何冊かを注文したところが思うように入手できぬいらだち¹⁸を記している。『英語青年』の「英文学新声」欄を担当している成田すらそうであった。

1949年には、前年12月のノーベル賞受賞を受けて、エリオットに関する記事が多く現われた。西脇順三郎、深瀬基寛、矢本貞幹、木下常太郎で「エリ

オット特輯」を組んだ『ポエジイ』，1949年6月の場合を見よう。

西脇は“比較的最近の作『四つの四重奏』に含まれている四つの詩は彼の自傳的宗教詩であろう。時間の問題を主としているが、それは根本は永遠という時間の関係における宗教詩である”¹⁹と記している。それ以上の言及はない。新作に触れているのは西脇のみである。この年1月に『エリオットの藝術論』を出版したばかりの深瀬は、“最近出版を傳へられてゐる『文化の起源についての考察』”²⁰へ興味を示している。かれの「エリオットの新しさについて」は、文化論、なかでも伝統論の再考を主張したものであって、近著のことばを借りれば、詩を論ずるまえの“一般論的事項”²¹にこだわっていた。深瀬は、わたしたちが求める作品には触れていない。

矢本は『聖灰水曜日』やエアリアル詩集の「シメオンの歌」などを最良の作品と見るひともあるが“『荒廢の土地』が詩として彼の代表作だと思ふ”²²としており、かれの視野に新しい詩集ははいっていない。木下の「T・S・エリオットと日本の現代詩」にも、新しい作品への展望は拓らけていない。1949年の半ばにあっても、情報の差、入手難、理解、さらに問題意識に、それぞれ多様な位相があったことが推測されよう。

ここで、木下の書き物を眺めておく。40代の文学者から見た鮎川たちの世代はこうである。

昭和六年の準戦時態勢にはいつた日本精神時代から昭和二十年の大敗北にいたるまでの日本の文學界が、T・S・エリオットの正統主義などに興味を持たなかつたのは言ふまでもない。しかし極く少数の詩人と英米文學の専攻者が彼に興味を持つてゐたことは事實である。

しかし昭和二十年の敗戦以後の若い世代の詩人の間にエリオットが研究され、共感されてゐることは注意に値するであろう。[以下-段落略]

敗戦から生まれて來た青年たちが、戦争以上に冷酷な敗戦の現在社會に、沙漠の中をさまよふ病犬の如くに夜の舗道に歩き續けるとき、エリオットの詩は意味を持つてくる。

木下は、つぎのように結んでいる。

雑誌『荒地』による日本の詩人がT・E・ヒュームやT・S・エリオットとともに西脇順三郎を高く評価してゐるのも、日本文化傳統、文學傳統とブルジョア自由主義文化に反感を持つてゐるからにはほかならない。三好豊一郎、鮎川信夫、田村隆一、北村太郎の『荒地』による若い詩人が、すり切れ色あせた文學傳統に疲れてゐる日本の現代詩にどんな革新をもたらすか、興味深く注意できる。マルキシズムの革命的イデオロギーの若い詩人がどんな革新を日本の文學傳統に與へるかの興味と同じやうに²³。

荒のいう、荒涼たる“精神の領野”を、また、木下のいう“沙漠の中をさまよふ”若い世代の姿は、ややもすれば“荒地”の詩人たちについての固定觀念をくりかえすことになるだろう。

わたしたちの関心は、中桐が「四つのクアルテット」と呼んだ作品と、鮎川信夫との出会いにある。

3

雑誌『荒地』は、1947年9月以来月刊で翌年1月の第5輯までつづいたあと、刊行が遅れ、6月の第6輯以降、途絶えていた。この雑誌に“興味深く注意できる”と木下常太郎が『ポエジイ』に書いた1949年6月には、さらに一年が経過していた。しかしながら、鮎川が1948年5月の『近代文学』、ついで、『詩学』の1948年12月と1950年1月に、『荒地』の立場を主張しており、さらに、『荒地』の立場に触れた加島裕造の書き物とともに、鮎川たち五人の詩を『近代文学』が1950年5月に掲載しているように、“荒地”は“エコール”として存続していた²⁴と考えることができる。そして、装いをあらたにした『荒地詩集1951』が刊行されるのは、1951年8月のことである。

『荒地詩集1951』に掲載された「現代詩とは何か」は、雑誌『荒地』以降の、鮎川の拠点と詩論を展開したものである。その末尾に“1949年—1950年”

と記されているとおり、「現代詩とは何か」は、1949年7月『人間』掲載の「現代詩とは何か」と、「詩人の条件」を表題として『詩学』の同年11・12月合併号から1950年7月のあいだに5回にわたって発表された評論を纏めたもの²⁵である。現行の第4章「なぜ詩を書くか」が「四つのクアルテット」に直接に触れている。初出は『詩学』1950年4月、「なぜ詩を書くか——詩人の条件(3)」である。これは、エリオット理解の軌跡を辿るとき、新しい詩集に触れた議論として、もっとも早いもののひとつである。

問題の章を見るまえに、鮎川の拠点を確認しておこう。詳しくは別の稿²⁶で検討しているので、図式的に纏めるにとどめる。

1945年冬、傷痍軍人療養所で“「歴史にかへる」とは、よりよく自己へかへるといふことに外ならない”と記した敗戦後の鮎川は、死んだ友人たちとともに自らも蘇生する可能性を求めていた。ただし“現代は荒地”であった。荒地からの蘇生は、T・E・ヒュームとエリオットのヒューマニズム批判を受けつぎ、エリオットの語るキリスト教に求められた。戦場から持ち帰った“生を問うことが、どうしても死に帰着してゆく悩める意識”を出発点とするしかなかった鮎川にとって、キリスト教への志向はことばだけの問題ではなかった。それは同時に、戦後のヒューマニズム論あるいは知識人に向けた疑いでもあった。しかも、ヒューマニズム論と呼応するデモクラシー讃歌は、まもなく冷戦の構造のなかで、西欧デモクラシー国家と Kommunismusとの対立を映し、一方の Kommunismusも現実の政治的課題となってゆく。“死に帰着してゆく悩める意識”は、この楽観性を許さない。1947年10月の「キリスト教とマルキシズム」を一例にとれば、かれの Kommunismus批判の拠点は、エリオットのいう“仮説”に支えられていた。「人生に関する二つの、そして唯二つだけの終局の合理的な仮説がある——カトリック主義と唯物論である」²⁷がそれである。ただし、カトリック主義を選択するとしても、その伝統のないわが国で可能であろうか。鮎川にとっては、デモクラシーがその鍵であった。1949年10月の「死と生の論理」で、かれはいう。“キリスト教の

目的を認め、自らの権力の限界と自ら批判の自由を認めるだけの謙虚さと寛容を持った国家や政治的制度”としては、“現在のところ”は“デモクラシーによるもの以外にはない”のである。ただし、デモクラシーが万能であると鮎川は考えない。それはヒューマニズムを基本的な発想とするからである。

「死と生の論理」のすこし前、1949年7月の『人間』に寄せた評論「現代詩とは何か」で、鮎川は“文明の荒廢の危機と、傳統の喪失による精神的不安の領土『荒地』の過剰な意味に耐えた詩人”²⁸としてエリオットを位置づけ、それを自らの拠点としてゆずらないのである。この評論は、1951年の「現代詩とは何か」に収められ、その第1章「詩人の條件」となる。

上に見る鮎川の立場は、「現代詩とは何か」の第6章「詩と傳統」に集約されよう。“『荒地』の運動の本屋に当る”²⁹と三好豊一郎がいうのは、この章である。初出は『詩学』1950年6月。「詩と傳統——詩人の條件(4)」の一節を引用する。

眞の傳統とは、過去から現在をつらぬいている價值ではなく、未來から現在へ、そして過去へとつらぬいている價值でなければならない。それこそ永續的價值と言ふべきものである。未來から現在へ、これには何の手がかりもない、といふことが理論的に一つの缺點の如く思はれるかも知れない。未來は果して如何なる文明の世界が全く解らぬではないか、と言ふかも知れない。僕には却つてこの未來の不明といふことこそ理論的な強みと思はれる。

現代に於て、未來の文明に關する二つの有力な假説が存在する。唯物論的假説(マ)とキリスト教的假説である。日本がそれらの影響をまぬがれて存在し得ると考へる者は、全く世界の大きさを知らぬ者である。しかしそれが假説であるかぎり、未來の文明はそれらと異なるかも知れない。しかし未來は世界の過去に含まれる、といふことを忘れてはならない。未來は決して日本の、ではなく世界の過去から切離されぬ。だが未來は現在及び過去を審判し、多くの収穫のなかから毒麥をよりわけるであろう。(付点引用者、注参照)³⁰

エリオットのいうキリスト教の伝統と、冷戦下のわが国の未来にかかわる選択の問題をひとつにしたあやうい論理は、力強い語り口によってかろうじて支えられている。

“未来の不明といふことこそ理論的な強み”とする立場に、“まさか唯物論的仮説やキリスト教的仮説を実現する世界が未来において忽然と現われ、その時はじめて過去に対する審判が開始されるなどは鮎川氏も考えてはいないだろう”³¹という大岡信は、一節の混乱をみごとに指摘している。ただし、鮎川の未来の不明という“理論的な強み”を支えていたのは、エリオットの“カトリック主義と唯物論”という“唯二つだけの終局の合理的な仮説”であった。

そして、もうひとつの“仮説”がここに働いていることに注目しなければならない。伝統の価値は“過去から現在”ではなく、“未来から現在へ、そして過去へ”つらぬかれている、と鮎川はいう。エリオットの伝統論からすれば、“過去から現在”へ力点がおかれるべきであろう。不明の“未来から現在へ、そして過去へ”というのは伝統論と矛盾するばかりか、“論理的に一つの缺點”である。ただし、これを“論理的な強み”とする確信もまた、「四つのクアルテット」に触れて、エリオットから得られたのであった。

4

鮎川が「四つのクアルテット」より」と、冒頭の一節を引用したのは、1950年4月。「なぜ詩を書くか——詩人の条件(3)」では、こうである。

現在の時も、過去の時も
 未来には一つの時になるだらう
 そして、未来は過去の中に含まれる
 もしすべての時が現在であるなら
 すべての時は贖ふことが出来ない³²

すでに引用した成田成壽と平井正穂の訳と比較されたい。“多分”あるいは“恐らくは”として訳出された謎めいた語り口に、鮎川はこだわっていない。とりわけ平井の場合、自らキリスト者としてエリオットのいう時間にかかわろうとする姿勢はその訳にも明かである。しかし、“未来の時は過去の中に含まれていよう”ではなく、“未来は過去の中に含まれる”と、鮎川は断定するのである。

鮎川はどのようにして新しい作品に触れたのか。平井がこの詩集を入手したのは、遅くとも1949年の後半であった。一方、1950年11・12月合併号の『詩学』に堀越秀夫の「四つの四重奏について——エリオットと現代——」³³があり、入手の可能性が拓られつつあったことがわかる。それでもなお、1950年4月の段階でこれを読むための困難³⁴は想像できよう。しかも、海外には解説書あるは研究書³⁵はいくつか存在していたが、入手の難しさも同様であった。

表題についていえば、この頃すでに『四つの四重奏』に落ち着きはじめていたときに、鮎川が「四つのクアルテット」を採用したことに注目したい。これは中桐雅夫によって定着していた。「四つのクアルテット」は限られた情報のなかで営まれた詩人たちの格闘の軌跡を背後にしていたのである。そして、作品への手引としては、すでにスペンダーの『1939年以後の詩』があった。中桐がよほどの意地悪をしないかぎり、この書を読むことは可能であった。

スペンダーの「四つのクアルテット」論はわずか4頁にすぎないが、直載にその魅力を語りつくした格好の入門である。わたしたちにとって重要なのは、冒頭の五行が“時間の本質に関するひとつの仮説”として扱われていることだ。“perhaps”という表現があるかぎり、この作品は宗教的立場を唱うものではない、“時間の神秘についてのさまざまな解釈の検証にもとづく真理の探究、あくまでも詩である”³⁶、とスペンダーはいう。冒頭の時間論もエリオットにとっては“ひとつの仮説”なのだ。上の鮎川の訳はどうか。かれはこの“仮説”の要となる“perhaps”をゆるやかに解釈し、結果として、仮

説がかれの確信となり指針となったのである。

たとえば、『荒地詩集1951』に収められた「橋上の人」に、鮎川はこう書いている。

誰も知らない。

未来の道は過去につづき

過去は涯しなく未来のなかにあることを、——⁵⁷

もちろん、“誰も知らない”という意味で、この時間もひとつの仮説である。ただし、それを鮎川は自らの指針として引き受けたのだ。

「未来は過去の中に含まれる」この仮説こそ、「詩と伝統」の、不明の“未来から現在へ、そして過去へ”という時間を支える“論理的な強み”として働いていたのだ。「四つのクアルテット」に触れた鮎川は、記している。

すべての時が現在ではない限りに於て、われわれは〈時を贖ふ〉ことが出来る。われわれは滅びることのない価値といふものを信ずることが出来る。「未来は過去の中に含まれる」といふ言葉の中には、われわれが歴史と共に滅びることのない永続的価値をすでに過去のうちに見出していることを暗示している。人間の救ひは、サルトルの實存的ヒューマニズムの如く、必ずしも常に前方にのみ投げ出されてゆくことにはないのである。(付点引用者)⁵⁸

選択によって現在を生かし未来を拓らこうとするサルトルの立場も、基本的には、未来への政治的行動を支えるひとつのヒューマニズム⁵⁹である。“未来から現在へ”とは未来主義ではない。未来は、その“永続的価値をすでに過去のうちに見出している”という意味で、“過去へ”向かうのだ。“すべての時が現在でない”とは、“過去の中に含まれ”ている“未来”への期待なのだ。

しかしながら、“未来は過去の中に含まれる”とし“過去は涯しなく未来の

なかにある”とすれば、いかにして、現在はそのなかに含まれつつなおも現在であることができるのか。“すべての時が現在ではない”とすれば、現在とすべての時との差異はどこにあるのか。すなわち、流れてゆく時にたいして、自覚された時をつきつけるとき、ますます現在の意味が問われるであろう。これは、“「歴史にかへる」とは、よりよく自己へかへるといふことに外ならない”と覚悟しながらも、“生を問うことが、どうしても死に帰着してゆく悩める意識”にとっては切実な問題であり、なぜ詩を書くかという問題に、そのまま関わってくるのである。

鮎川は、こう記している。

詩の世界が〈現在〉のみによつて成立しないことは一つの自明の理である。それは多くの時を、考へ得るかぎりの多くの時を包含する。それは「時によつて満されたところの現在」である。すべての時を〈現在〉の如く錯覚することによつてしか、時といふものを見分けようとしぬ人達は、結局現在すらも見分ける能力を持たぬ者である⁴⁰。

“すべての時が現在ではない”故に、過去と未来のあいだに包含され欠落しかねない現在は、「時によつて満たされたところの現在」として定位されるのである。すべての時を備えた現在は、可能性を秘めた現在である。もちろん、“時によつて満された”この現在はすべての時とつながりうるから、“すべての時が現在ではない”ということができよう。両者は視点を交換したものにはすぎない。しかし、論理ではなく、「時によつて満たされたところの現在」こそ、“荒地”の蘇生に関わる視点であった。ただし、問題は、その現在を実感としてとらえること、“すべての時”によって現在を満たす方法であった。

なぜ詩を書くのか。それは、

自らの危やふやかな存在の中に、外から明かな光を導き入れることであり、光を収斂して一つの中心を発見することである。エリオットが「静

「諷の一點」と呼んだやうな、さうした心[・]靈[・]の[・]働[・]きを凝視し、〈時を超越せるもの〉を、自らの時の中に認識するに至るまで、自らの世界を愛撫することである。それ以上、われわれは詩に何を望むことが出来るだらうか。(付点引用者)⁴¹

「四つのクアルテット」は、光を収斂した“一つの中心”あるいは“静謐の一點”⁴²への接近が可能であることを鮎川に教えたのである。その“光”は、現在の“自らの危やふやかな存在の中に、外から”導き入れられるはずであった。ただし、エリオットが唱うことができた“光”や“心[・]靈[・]の[・]働[・]き”は、ヨーロッパの伝統にあった。ヨーロッパの詩人は、その伝統論をもって敗戦後の“荒地”を位置づけようとしていた30歳の鮎川に、さらに、“荒地”が未來に蘇生するために、現在を生かす方法を示したのであった。しかし、そのことが逆に、“現在”の耐え難さをますます強くすることになるであろう。この逆説が信仰への道である、といった安易な理屈は振りまわすまい。

1951年版で“心[・]靈[・]の[・]働[・]き”を“精神の働[・]き”⁴³と置きかえたところに、エリオットの世界を自らのものにしようとする鮎川の軌跡の一端を見ることが出来る。しかしながら、1951年8月になっても、「詩と傳統」の結語は、1950年6月のままであった。

世界の未來から一條の光りを摘みとることさへ出来れば、いまわれわれを迷はせ、その解決に非常に困難を感じさせている傳統の問題も解決されるであろう。だが僕はこの序論に於て、早急な判断を慎まねばならぬ。それはまだわれわれの仕事と共に終つていない問題であり、僕がここで一つの結論を述べたとしても、それが結論と共に終らないからである⁴⁴。

これは、木下常太郎が注目する現代詩の“革新”とはほど遠く、また、荒正人の戦争責任の追求とも位相を異にするのだ。

5

堀越秀夫と栗山脩の共訳で『四つの四重奏』が現れるのは、『詩学』1951年4月である。わが国で最初の完訳である。1951年は、わが国のエリオット理解が新しい情報と作品を手にいれて、大きく展開しはじめた年⁴⁵であった。その年8月に『荒地詩集1951』に収録された鮎川信夫の評論「現代詩とは何か」が、末尾に“1949年—1950年”と記されて、登場したのだ。再軍備論争、マッカーサー離日、朝鮮戦争休戦会談開始とつづいたこの年、サンフランシスコ条約が調印されたのが、その翌月、9月のことであった。

エリオットの新しい作品がいよいよ本格的な研究の対象になりはじめたころ、1951年10月、エリオット理解の困難さについて、平井正徳はこのように記している。

ヨーロッパやアメリカの批評家達の解説によつて、知識として〔エリオットの評論や詩や劇の意味について〕一應知ることは聡明な人達には決して不可能なことではない。そして、エリオットが「我々の傳統」とか「我々の文化」という、その言葉の力に魅惑され引ずり込まれて、聡明な人達が少しの抵抗感もなしにエリオットの「我我」があたかも、我々の「我々」であるかのように感じ、考え、理論をすすめてゆくのである。しかし、傳統や文化が、單に觀念、もしくは論理の水準面の事柄でなく、もつと根柢にある、いわば人間の生の水準面にかかわる事柄だと気づけば、問題は極度の緊迫した様相を帯びて來よう。

また、平井はいう。

『荒地』は或る程度我々も觀賞し享受することが出来るとしても、エリオットの極めて主體的な宗教的な體驗を取り入れていると思われる『四つの四重奏』は、我々の理解を相當に困難なものにするのである。勿論、我々の間にも、この作品の基調をなしている主題である「時間と無時間」の關係（關係ならざる關係）について考え、苦しんでいる人もなくはな

い。しかしそれは多く哲學的な追求であつて、内的體驗としてどこまで追求されているのであろうか。我々にもし「時間と無時間」の關係について、自からの救済を賭けた體驗があるならば、エリオットの詩作品を通じて、我々はエリオットの體驗を再構成することが出来るであらう。〔中略〕エリオットに對して盲目的な、もしくは口先きだけの讚美を呈する時代は、もう過ぎ去りつつあるのではないかと思う。或は、むしろ、眞實なエリオット理解は、これから先の話だ、ともいえるであらう。いろんな意味で、我々がエリオットを批評の對象として選ぶ場合、それが我々自身の、批評する者としての試金石であること、いいかえるならば、我々の批評のモラルを、ためすものであることは、我々の注意に値することである⁴⁶。

説明は要しない。鮎川についていえば、「四つのクアルテット」との出会いが、“自らの救済を賭けた”検証をかれに強制したのだ。

1950年4月の「四つのクアルテット」を引用した評論が、わが国のエリオット理解の軌跡でもっともはやいもののひとつであったこと自体が、鮎川の名譽なのではない。むしろ、哲學的考察や研究書の追従ではなく、詩人としての読みを展開し、それを自らの方向として肉化しようとしたところにある。たとえば、「時によつて満たされたところの現在」は、アウグスチヌスの時間論などとは無縁に、作品の冒頭の五行から読み取られたものであったことを思わねばならぬ。

「現代詩とは何か」を収めた『荒地詩集1951』に、鮎川の「橋上の人」がある。ここにも、「四つのクアルテット」に触れた“荒地”の詩人の、新しい地平が拓らかれている。

一九四〇年の秋から一九五〇年の秋まで、
あなたの登音と、あなたの足跡は、
いたるところに行きつき、いたるところを過ぎていった。

そして、詩人は“出發の時よりも貧しくなつて”戻つてくる。

橋上の人よ

まるで通りがかりの人のように
あなたは灰色の街のなかに歸つてきた。

新しい追憶の血が、
あなたの眼となり、あなたの表情となる「現在」に。

橋上の人よ

さりげなく煙草をくわえて
あなたは破壊された風景のなかに歸つてきた。

新しい希望の血が、
あなたの足を止め、あなたに待つことを命ずる「現在」に。

橋上の人よ⁴⁷

「現在」は「時によつて満されたところの現在」にはかならない。しかしながら、以降のかれの作品を追ってゆくとき、現在のおおきな欠落感に読者は否応なしに気づかされるであろう。現在の不確かさは、“死人の眼”⁴⁸で振りかえった1940年にはじまり、8月15日を“終末の日”として区切ることなくつづく過去の重みのためであった。(1990年10月)

注

- 1 本稿では、単行本・雑誌の発行月と月号を区別せずに扱う。たとえば、4月と4月号は特別のことがないかぎり同等に扱う。また、できるかぎり初出文献に基づくことに努める。雑誌名は現代表記にあらためるが、単行本、評論題はそのままとする。引用にあたっては、旧漢字は、便宜上JIS第二水準までとし、残念ながら徹底していないが、できるかぎり元の表記を尊重することに努めた。戦後の民主化の動きをも反映しつつ公布された当用漢字表(1946年11月)以降の表記の推移が、それぞれの漢字とかなづかいに見られよう。とりわけ戦後に焦点をあてるとき、表記の変遷は、時代の軌跡を見るひとつの指標ともなりうるであろう。
- 2 N・R・T・ [成田成壽]「新刊批評の英文研究——“[Mr.] T. S. Eliot (4)” by Peter Quennell」『英語青年』第75巻10号(15 August, 1936), 342 その(1)(2)(3)は、それぞれ、第75巻7号、8号、及び、9号。出典は、Peter Quennell, "Mr. T. S. Eliot," *New Statesman and Nation*, 11 (18 April, 1936), 603-604.
- 3 志賀勝「T. S. Eliot: *East Coker* (1)-(4)」『英語青年』第86巻8号(15 Jan.,

1942), 241-243, 9号 (1 Feb., 1942), 271-272, 10号 (15 Feb., 1942), 306-308, 及び, 11号 (1 March, 1942), 334-336. なお, 志賀の仕事には、『現代英米文學の研究』(創元社, 1935年)に収めた論考に、「理智と信念——T・S・エリオットの方向——」や「エリオットの信仰詩」などがあり, さらに、「教會と現代——T・S・エリオットの劇詩と論集——」『神学評論』(1. 1937), 11-24は、「現代文學と宗教性」とともに、『文學と信念』(理想出版部, 6. 1940)に収められた。

なお, James John Sweeney, “*East Coker: A Reading.*” *Southern Review.* 6:4 (Spring, 1941), 771-791は, のち, Leonard Unger(ed), *T. S. Eliot: A Selected Critique* に収録される。

- 4 「雄鷄通信 Mar. 1946」『雄鷄通信』第2巻6号 (4. 1946), 29. なお, 同じ月, 1946年4月に, 北村常夫訳『エリオット文學論』が新樹社から再版されている。これは従來の書誌に漏れているので注意。
- 5 週刊朝日編『値段の明大正昭和風俗史』(朝日新聞社, 12. 1980), [141頁]。
- 6 荒正人「終末の日」『近代文學』第1巻4号 (6. 1946), 2-20より, 15.
- 7 西村孝次「荒地へ——T・S・エリオットにおける詩と批評——」『荒地』創刊号 (9. 1947), 1-11.
- 8 斎藤光「神の暗黒——T・S・エリオットの詩——」『基督教文化』25号 (5. 1948), 44-55より。正確には“hamartiology (罪惡研究)”の提唱(54)である。斎藤は“hamartiological な世界を更に探究すべき時である”(53)ともいう。
- 9 佐藤清「T・S・エリオットの詩について(一)(二)(三)」『詩学』第3巻5号 (1?. 1948), 30-31, 第6号 (3?. 1948), 42-45, 同7号 (4. 1948), 42-45.
- 10 斎藤光「神の暗黒——T・S・エリオットの詩——」, 53.
- 11 平井正穂『イギリス文學試論』(研究社, 11. 1965), 100頁。
- 12 中桐雅夫「不安の年——W・H・オウデン論——」『荒地』第6号 (6. 1948), 46.
- 13 中桐雅夫「英詩の動向——新ロマンティズムへの道——」『詩学』(11. 1948), 9-15. “「四つのクアルテット」”の名称は, 15. ここで中桐が利用した文献は, ジョン・リーマンの「ペンギン版ニュー・ライティング」の他, 多種にわたっている。中桐はこの年1948年8月に「アメリカ現代詩の諸様相」を書いており, これは遅れて翌年5月の『詩学』(42-51)に登場する。のちに, 中桐はさらに長文の「現代英米詩展望」『詩学』第6巻3号 (4. 1951), 116-141を書き, ここでは“「四つの四重奏曲」”と呼んでいる(116)。それぞれに長文であり, しかも翻訳による詩の引用は多彩を極め, その仕事ぶりは驚異的である。
- 14 H・M・[平井正穂]「T・S・エリオットの『四つの四重奏』」(新刊紹介「世界の窓」)『展望』(3. 1949), 47-48.

- 15 平井正穂「詩人T・S・エリオットー1ー」『不死鳥』第2号(4.1949), 4-18. 引用は「詩人T・S・エリオット」『イギリス文学試論』所収, 122頁による。なお, “その2”については未詳。
- 16 平井正穂『イギリス文学試論』, 100頁。
- 17 平井正穂「T. S. Eliot: *Four Quartets*」(『海外新潮』)『英文学研究』第26巻2号(12.1949), 328-332. なお, ここで“注釈”書として, Raymond Preston, *Four Quartets' Rehearsed* (1948) と Stephen Spender, *Poetry since 1939* (1946) の二点があげられている。
- 18 成田成壽「ここかしこ」『英文学研究』第26巻2号(12.1949), 379. また, “終戦後, 東京の古本屋では, 洋書が, ほとんどまったく, なくなつたことがあつた。ちかごろは洋書も, だいぶ, ならんでいるようになつた”も, 同頁。
- 19 西脇順三郎「T・S・エリオットと近代人」『ポエジイ』第8輯(6.1949), 97. なお, 他に初出未詳として, 「最近のエリオット」『西脇順三郎全集』第8巻(筑摩書房, 6.1972), 289-295頁がある。ここで西脇はスペンダーの『一九三九年以後の詩』を採りあげて『四つの四重奏』を論じており(292頁), 「T・S・エリオットと近代人」より情報は深まっている。内容が類似しており, この頃, あるいは, 以降に書かれたものであろう。一方, 1950年のおそらく前半期に, 「T・S・エリオット」『現代詩講座』第4巻(創元社)があるが, 未見であるので, 両者が同じものかどうか確認できない。
- 20 深瀬基寛「エリオットの新しいさについて」『ポエジイ』第8輯, 112. なお, 深瀬基寛訳『文化とは何か』は, 1951年9月に出版される。原本の出版は, 1948年11月。
- 21 深瀬基寛「序・さかしまに」『エリオットの藝術論——方法から體系へ——』(比叡書房, 1.1949), 5頁。なお, この末尾に, 1948.8.5の日付があることに注意。この頃, この書の原稿は完成していたと推測できる。深瀬は座談会「批評精神の誕生」『世界文学』第10号(5.1947), 36-45, 『エリオットの藝術論』を書く発端となった「傳統と正統の問題」『展望』32号(8.1948), 2-12, さらに「ノーベル賞の詩人T・S・エリオット」[アメリカ文学編集部との対談]『アメリカ文学』第1巻7号(12.1948), 1-3など, この頃一貫してキリスト教の伝統とわが国の課題を主張していた。まさに, 作品に入るための予備作業としての“一般論的事項”が頭を占めていたのだ。これは戦前の『現代英文學の課題』から引き継がれた課題であった。
- 深瀬が「T文化の起源についての考察」の原本「T文化の定義のための覚え書」を借りて読んだのは, 「文化と宗教との新しい展望」『世紀』(3.1950)を書く前であった。『批評の建設のために』(南雲堂, 1956), 205-206頁を参照。また, 原本の紹介書評の早いものとして, 最所フミ「T・S・エリオットの『文化の定義のためのノート』」

- 『人間』第5巻12号(12.1950), 87-93がある。
- 22 矢本貞幹「エリオットの詩論と詩」『ポエジイ』第8輯, 118. 付点は原文のまま。矢本は1938年岩波文庫版の翻訳『文藝批評論』で知られるが, 前年, 1948年10月『近代イギリス批評精神』を創元社から出版していた。
- 23 木下常太郎「T・S・エリオットと日本の現代詩」『ポエジイ』第8輯, 125-126, および, 127. 末尾に1949年1月15日の執筆時期が記されているが, 発表は6月である。なお, 『荒地』第3輯(11.1947)は「西脇順三郎特輯」であった。木下もここに「旅人かへりぬ——近代詩の頂点——」を寄稿した。
- 24 鮎川信夫「『荒地』の立場」『近代文学』第3巻5号(5.1948), 44, 「『荒地』」[特稿「我々の立場」]『詩学』(12.1948), 15, 「『荒地』」[特稿「現代詩への提言」]『詩学』(1.1950), 151. そして, 加島祥造「『荒地』の荷について」『近代文学』第5巻5号(5.1950)78. 同号に採録された作品は, 鮎川信夫「死んだ男」, 北村太郎「雨」, 黒田三郎「賭け」, 三好豊一郎「手」, 田村隆一「一九四〇年代・夏」である。
- なお, 『荒地詩集』の刊行予定は, 「The Waste Land」[編集後記]『荒地』第2巻1号(1.1948), 63につぎのように記されている。「ひとつの試みとして, 『荒地』アンソロジーの刊行を企劃してゐる。既に原稿も整理が終り, 後は印刷に附すばかりで, 近く豫約募集をはじめつもりである。第一冊目の執筆者は鮎川信夫, 北村太郎, 田村隆一, 三好豊一郎, 黒田三郎の五名, 約三百頁内外となる豫定である。(黒田三郎)」これに呼応して, 64頁に広告がある。また, 同号, 裏表紙裏の「次號予告」に, 「荒地同人「Xへの献辞」」があるが, これは実現しなかった。ただし, 次号, 第6輯(6.1948)の表紙裏の“1948年版”『荒地詩集』の広告のなかで, “序文・『Xへの献辞』より”として, 一節が引用されている。『荒地』の“献辞”は, 1948年に鮎川宅で同人が集まり草稿を検討したとされている。ただし, 紙型まで作られながら行方不明となったこの『荒地詩集』の謎には本稿は立ち入らない。
- 25 掲載誌はつぎのとおり。鮎川信夫「現代詩とは何か」『人間』第4巻7号(7.1949), 36-43, 「詩人の条件(1)」『詩学』(11・12月合併号, 1949), 70-75, 「祖国なき精神——詩人の条件(2)」『詩学』(2・[3].1950), 30-35, 「なぜ詩を書くか——詩人の条件(3)」『詩学』(4.1950), 48-55 および 94, 「詩と傳統——詩人の条件(4)」『詩学』(6.1950), 72-80, そして, 「詩への希望——詩人の条件(5)」『詩学』(7.1950), 51-63
- 26 「歴史の感覚をめぐって——戦前のT・S・エリオット理解から継承されたもの——」(仮題, 未発表)。これは, 拙稿「歴史の感覚をめぐって——戦前のT・S・エリオット理解の一側面——」『同志社法学』第200号[第200号記念論集Ⅱ]の続編となる予定。
- 27 鮎川信夫「キリスト教とマルキシズム」『純粹詩』(10.1947)。引用は『鮎川信夫著

- 作集』第10巻（思潮社，11. 1976），355頁による。エリオットの文言は，中橋一夫訳「現代教育と古典」『異神を追ひて』（生活社，6. 1943），143頁を借りたもの。なお，「犠牲になった世代」にも，すでに同様の引用がある。『短歌研究』1946年6月とされているが，この雑誌に該当のものはない。『日本短歌』であろうか。初出については未確認である。『鮎川信夫著作集』第5巻，74頁参照。
- 28 鮎川信夫「現代詩とは何か」『人間』第4巻7号（7. 1949），38。なお，“過剰な意味に耐えた詩人”は，のちの1951年版では，“幻滅に耐えた詩人”と修正される。
- 29 三好豊一郎「編集ノート」『鮎川信夫著作集』第2巻（思潮社，11. 1973），394頁。
- 30 鮎川信夫「詩と傳統——詩人の條件（4）」，67。たとえば，おわりの二行を，1951年版と比較されたい。“未來は決して日本の，ではなく世界の過去から切離されぬ。そして未來は現在及び過去を審判し多くの収斂のなかから毒麥をよりわけるのである（付点引用者）。”逆説の“だが”を，因果関係の“そして”に置き換えてみても，明快な論理は浮かびあがってこない。未來の論理の不確かさは，わか国の伝統主義者への不信と未來へのはげしい期待に支えられた鮎川の語り口によって，かろうじて支えられているのだ。
- 31 大岡信「戦後詩人論——鮎川信夫ノート——」『詩学』（5. 1954），53。なお，初出時の文言は，のちの「鮎川信夫ノート」『大岡信著作集』第4巻所収のもの，さらに『鮎川信夫著作集』第10巻所収のものと，微妙に異なることに注意。
- 32 鮎川信夫「なぜ詩を書くか——詩人の條件（3）」『詩学』（4. 1950），53。これは注に“「四つのクアルテット」より”と記されている（94）。ただし，鮎川は，のちの「詩の機能について」『文学』第21巻1号（1. 1953），9-17では，『四つの四重奏』と呼ぶ（14）ことになる。「詩の機能について」には深瀬基寛『現代の英文學』からの引用があり，その影響もあったらう。深瀬は『四つの四重奏』を採用していた。もちろん，これはすでに一般化していた。
- 33 堀越秀夫「四つの四重奏について——エリオットと現代——」『詩学』第5巻9号（11・12月合併号，1950），48-60。堀越の部分訳を参考に示す。“現在の時間と過去の時間は／恐らくとも／未來の時間の中の現在である／そして 未來の時間は過去の時間に含まれてゐる／もし全ての時間が永遠に現在ならば／全ての時間は厭はれることがない”（50）。また，堀越秀夫・栗山脩の共訳『四つの四重奏』【『詩学』第6巻3号（4. 1951），80-114】では，こうである。“現在の時間と過去の時間は／恐らくふたつとも未來の時間の中に現われる／また未來の時間は過去の時間の中に含まれる／もしあらゆる時間が永遠に現在であるならば／あらゆる時間は厭われない”（80）。
- 34 上の引用のみならず，のちに見る鮎川の「四つのクアルテット」への言及が「パーセント・ノートン」に集中していることに注意されたい。注⑨にあげた西脇順三郎の

- 場合でも、「パーント・ノートン」の冒頭の時間論によって『四つの四重奏』が解説されているように、作品全体に入るためには、まず冒頭の時間論と「パーント・ノートン」が克服されねばならなかったのである。ここでは、鮎川が入手の困難な状況下で「四つのクアルテット」を手にしたという前提で議論をすすめている。しかしながら、その最初に置かれた「パーント・ノートン」が『全詩集 1909-1935』のものと同じであることを知れば、これにもとづくことが可能であったことも念頭に置いていい。
- 35 1950年4月までに存在していた単行本での解説・研究書については、ここで紹介する紙面がない。平井正穂編『エリオット』[20世紀英米文学案内 18] (研究社, 1967) の「書誌」を参照されたい。これらいずれにも、鮎川がいう「時によつて満されたところの現在」に相当する表現はない。
- 36 Stephen Spender, *Poetry since 1939* (London: Longmans [published for the British Council], 1946), p. 14.
- 37 鮎川信夫「橋上の人」『荒地詩集 1951』(荒地出版社, 8. 1951/[新装版] 国文社, 7. 1975), 57頁。「なぜ詩を書くか——詩人の條件 (3)」と並行してこの作品を引用する根拠は、後注 37 を参照。
- 38 鮎川信夫「なぜ詩を書くか——詩人の條件 (3)」, 54
- 39 このことについては、別稿で詳しく論ずる。なお、1948年初出の福田恒存の「サルトル」『福田恒存全集』第2巻(文藝春秋, 1937) 所収, 143頁も参照されたい。
- 40 鮎川信夫「なぜ詩を書くか——詩人の條件 (3)」, 53.
- 41 上掲評論, 54.
- 42 現在では“一つの中心”あるいは“静謐の一点”は、作品のおおきなテーマとして語られるが、1950年4月の段階ではまだ定着していなかった。スペンダーもこのことを強調してはいない。もっとも、入手可能性とはべつに、この点に注目した読みと、1948年の論考集, Leonard Unger (ed), *T. S. Eliot: A Selected Critique* 所収の, Louis L. Martz, “The Wheel and the Point: Aspects of Imagery and Theme in Eliot's Later Poetry” (1947) がすでにあった。
- この論考集のもっとも早い書評紹介に、最所フミ「二つのエリオット論——エドモンド・ウィルソン, ステファン・スペンダー」【書評紹介】『雄鶏通信』第6巻6号(7 1950), 55がある。鮎川がこの一節を書いている頃、あるいは、その直後に、この書がわが国にすでに存在したことが確認できる。かずある論文のうちから、最所が、とりわけてこの二点に注目したことは、鮎川たちの関心に共通するところがあり興味深い。それはともかく、鮎川にこの書を読む機会があったとしても、かれの「四つのクアルテット」の読みに参考になったかどうかは疑わしい。
- ほかに何らかの手引あるいは解説をもとにしたという証拠がないかぎりでは、鮎川

の読みは「四つのクアルテット」から直接に得られ焦点をあてられたものと考えはかない。もちろん、「静謐の一點」という訳については、すでに中桐雅夫が『詩学』1949年5月の「アメリカ現代詩の諸様相」にオーデンの「不安の年」に触れたところで、「エリオットの『静謐の點』——原罪は恕され、苦痛は喜びのうちに享受され、破滅した反逆者も生気を取りもどす場所」（46, 44も参照）としており、その説明はともかく、「静謐の點」はその重要性ともに、用語としても共有されていた。

- 43 鮎川信夫「現代詩とは何か」『荒地詩集 1951』, 167頁。
 44 鮎川信夫「詩と傳統——詩人の條件(4)」『詩学』(6.1950), 78.
 45 単行本にかぎっても、1月の福田恒存訳『カクテル・パーティ』, 8月には深瀬基寛『現代の英文学』, 9月には、おなじ深瀬の訳で『文化とは何か』がつづく。
 46 平井正徳「T・S・エリオット」『文学講座 III 文学のジャンル』（筑摩書房, 1951）, 191頁。
 47 鮎川信夫「橋上の人」『荒地詩集1951』, 56-57頁。

療養所において鮎川は、1943年の「橋上の人」に“新しく加筆し不備を補ひ”つつあった（「戦中手記」『鮎川信夫著作集』第7巻[思潮社, 1974], 259頁）。新稿「橋上の人」は、『ルネサンス』第9号（6.1948）に登場する。すでに、『荒地』第2輯（10.1947）の裏表紙裏の「11月豫告」に「橋上の人」が記されているが、これは実現しなかった。おそらく、予告されたこの作品が『ルネサンス』へ掲載されたのであろう。ついで「橋上の人」が登場するのが、『荒地詩集 1951』である。1948年6月のものは未見であり、加筆あるいは修正の跡を確認しえない。

しかしながら、この引用にある“一九四〇年の秋から一九五〇年の秋まで”を文字どおりとれば、1948年版にさらに加筆されたと推測される。そして、注87の引用は、「四つのクアルテット」を直接映したものであるから、この部分はこの作品に触れた時期以降のものと考えねばならない。そして、1948年6月の時点で「四つのクアルテット」を読むことはまず無理であったから、加筆の時期はさらに後、「なぜ詩を書くか——詩人の條件(3)」を発表した1950年4月の前後、あるいはそれ以降と推測される。もちろん、1948年の「橋上の人」は、1951年版のために、その直前に手を入れられた可能性もある。すでに「戦中手記」で、“過去と未来への橋上へ立”つ姿（259頁）が意識されており、以降の新稿も、この意識の延長上にあるが、注87の三行の逆説的な時間は、新しい発見であったと考えねばならない。なお、1951年版と現行のテキストには、さらに、若干の修正があることに注意。

- 48 参照、田村隆一「死人の眼」『詩と批評A』（思潮社, 1976）, 41-50。初出は『展望』（11.1966）。田村隆一「死人のやうに」, 『若い荒地』所収『詩と批評D』, 148頁以下、及び、鮎川信夫「戦中手記」, 242-243頁、及び276頁も参照。

Synopsis

Nobuo Ayukawa and *Four Quartets*:
With a Brief Account of Eliot Studies
after the Second World War

Akira Nakai

Four Quartets (published in 1943 in America, 1944 in Britain) was not available for sometime after the War. An American copy of the poem was seen in 1946 on a shelf of a second-hand bookshop in Kanda, Tokyo, but this was an exception. A Faber version, brought by Edmund Blunden, who, as Cultural Envoy, arrived in December 1948, was one of the earliest copies introduced to Japan. Masao Hirai handcopied the poem and reviewed it as a latest work in March 1949.

The year 1949 saw a gradual increase in the import of foreign books, and in the years that followed Eliot's works, *Four Quartets*, *Notes towards the Definition of Culture* (1948), and *The Cocktail Party* (1950), began to gain wider attention. The translations of the three all appeared in 1951. This marked the beginning of the Eliot vogue in the decade and after.

One of the earliest references to *Four Quartets* occurred in May 1950, in an essay by Nobuo Ayukawa (1920-1987), which was to make a chapter in "What is Modern Poetry" in the first series of *The Arechi [Waste Land] Anthology* (August 1951). The significance of that reference, with the quotation from the first five lines of "Burnt

Norton”, lies in its impact on the young poet struggling for life.

It is understood that Ayukawa wrote poems and essays under the influence of *The Waste Land* and the idea of tradition, especially in “Tradition and the Individual Talent.” He, in fact, shared the sense of desiccation and a hope for spiritual recovery of his generation who had undergone suffering on the battle field. The lack of tradition, too, obsessed him in that it was the very thing to be recovered where the old system and value were denied. The problem remained, however, that the spiritual recovery and tradition that Eliot extolled were both essentially Christian.

It was the meditation on time in the opening lines of *Four Quartets* that gave Ayukawa a clue to solve the dilemma. Omitting the poet's reservation of “perhaps,” “time future contained in time past” became his conviction: future/recovery is realized only through looking back and sticking to the past experiences, and the past will be realized in the future. Since “present” is the moment “filled with various aspects of time,” the awareness of this active moment promised the only hope for the future, as well as the recovery from the past. Thus Eliot's lines brought him a fresh view for the waste land and for the tradition which “abandons nothing on route.”

Witnessing the Eliot studies begin to flourish, Masao Hirai warned in 1951 that the reading of *Four Quartets* should not be an accademic affair. Honour goes to Ayukawa not only for his early reference to the poem, but for his approach to it, as a poet searching for value.